

アンドレ・シエニエ覚書（二）

永田，英一

<https://doi.org/10.15017/2332863>

出版情報：文學研究. 56, pp.73-82, 1957-07-05. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



アンドレ・シェニエ覚書 (二)

永田英一

シャトوبرリアンが一八〇二年「キリスト教真髓」の中でアンドレ・シェニエ¹⁾の存在を明らかにし、この不幸な青年詩人へ文学的関心と人間的同情をよんだことは先の機会にのべた。^(本誌五〇十一号)。そしてこのことは果してローマン派の人々をアンドレの詩の星に近づける機縁となつたが、その後サント・ブーヴに先立つて、かれらと同じ方向により現実に推進したのはヴィクトル・ユゴーである。²⁾

- 1) André Chénier (1762—1794)
- 2) Victor Hugo (1802—1885)

二、ヴィクトル・ユゴー

アンドレ・シェニエの作品集は一八一九年八月、詩人の死後十五年、アンリ・ド・ラトゥーシュの手ではじめて公刊された。そして当時の文学界にたちまち大きな反響をよび、いわゆる「一八一九年の批評」をまき起した。シェニエの人と作品について「ルヴェー・アンシクロペディック」「十月号」ではネボミューセーヌ・ルメルシエが長文の論評を加え、「リセ・フランセ」では主

筆シャルル・ロアゾンがみづから四つの論文を書き、「ジュールナル・デ・サヴァン」(十一月号)にはレイヌアールが注目すべき論文をよせた。若き日のヴィクトル・ユゴーがシェニエについて論じたのもまた、この同じ機会に、みづから創刊した雑誌「ル・コンセルヴァトゥール・リテレール」^{*}の第一冊においてである。

* *Le Conservateur littéraire* (1819-1821). ユゴー三兄弟(アンル・ユジエーヌ、ヴィクトル)がシャ

Publicola Petisot, etc.)を用いた。このシェニエの書評にもたゞ、とのみ署名しているが、ヴィクトルのものであることは確實であり、かれ自身ものにこれを「アンドレ・エ・シェニエについて」と題して *Littérature et philosophie mêlées* (1834) の中に収録している。但し一八四〇年のエスタン版「アンドレ・シェニエ散文集」の巻頭に、この同じ文章がユージェヌ・ユゴーの名で載せられているのは紛わしい。

*

「ル・コンセルヴァトゥール・リテレル」の創刊号の「フランス文学」(書評)には、ラムネの「宗教的無関心論」とともに、ラッシーユ編「アンドレ・シェニエ全集」がとりあげられたが、筆者ヴィクトル・ユゴーは「アンドレ・ド・シェニエ全集」と改めて、尊敬と同情にみちた論評を加えている。以下われわれはこのユゴーの文章をなるべく忠実に紹介しよう。――

1) *Oeuvres complètes d'André de Chénier.*

- 2) 文中に引用された詩の題名などはブレイヤード版「アンドレ・シェニエ全集」によつて筆者が附したが、用語、句点の異同についてはあえて訂正しなかつた。

新しい思想と誤謬の世紀に育つた青年が、謙讓のあまり、早い名声をもとめずに孤独な研究にいそしむ。若干の友の激励があれば

ば十分だ。かれは自分の時代を名誉にも批評にも埋れてすごす。突如、非命に仆れ、¹ 若くは後世のために何もしなかつた² という。しかしかれは、自分がなしえたであろうことを示すことによつて、かれの名誉のために十分になしたのだ。

これがアンドレ・ド・シェニエであつた。真実の才能をもち、おそらく敵のみが欠けていた青年シェニエであつた。

</

ことが問題なのだ。また革命の斧がその未完の作品の中に血に染まつて置かれていたというのに、誰があえてその欠陥を非難しよう。」

その上、今日われわれがその遺産をうけた人が、どんな人物であつたかを考えるならば、安易に微笑をうかべるどころでない。それは「高貴で謙虚な性格、魂のあらゆる優しい感動に身をまかす青年、勉学の友、自然の熱狂者」であつた。あのとき革命は切迫し、古い諸世紀の復活が宣言されていた。シェニエは欺かれるべくして欺かれたのだ。かれは幻影を追ひ、深淵への道を夢中に行進する民衆に加わる。やがて錯乱した人々は、目をひらいて首をめぐらす。もう後退する暇はなかつた。従容として死ぬのみであつた。シェニエは断頭台の上でかれの世紀を否認したのだ。かれはまたルイ十六世の弁護に身を挺した。この犠牲が天上へ送られる時、かれは民衆に訴える最後の書簡をしたためたが、死刑執行人の良心には、ついに空しくつた。

この愛すべき青年は「完全な詩人」となる時をもたなかつた。だが、われわれに遺された作品に目を通すと、すべての欠陥を忘れさせる断篇に出会す。その若干を拾つてみよう。まづ人馬を仆すテーゼの描写だ。

Il va fendre sa tête ;

Soudain le fils d'Égée, invincible, sanglant,
L'aperçoit, à l'autel prend un chêne brûlant,

Sur sa croupe indomptée, avec un cri terrible,
S'élançe, va saisir sa chevelure horrible,
L'entraîne, et quand sa bouche ouverte avec effort
Crie, il y plonge ensemble et la flamme et la mort.

(l'Aveugle)

(大意。——豪勇無双のエジエの子(テーゼ)は、祭壇から燃える樅の木をとり、氣合ひもるとも人馬にとびかかり、鬚をつかんで引きずり廻わす。口をひらいて吼聲をあげると、その中へ焰と死を突

Étend du vieux lion la dépouille héroïque,
Et, l'oeil au ciel, la main sur la masse antique,
Attend sa récompense, et l'heure d'être un dieu.
Le vent souffle et mugit, le bûcher tout en feu
Brûle autour du héros, et la flamme rapide
Porte aux palais divins l'âme du grand Alcide.

(la mort d'Hercule)

(大意。——エルキュールは足下に老ライオンの遺骸を横たえ、天を仰ぎ、棍棒に手をかけ、神となる時を待つ。風は吹く。燃えさかる火刑台はあたりに輝き、すばやい焰がアルシード(エルキュール)の魂を神の宮へはこぶ。)

オヴィドの描いたエルキュールは、まるで豪華な床に臥すように平然と火刑台の上に寝ているが、それよりもわれわれはこのイマージュをとる。

* Cf. Ovide, *Métamorphoses*, IX.

見事な詩句、克服された困難の価値に輝く詩句をみたいとあれば、ページをくればよい。引用するにも選択に困るくらいだ。

Toujours ce souvenir m'attendrit et me touche,
Quand lui-même appliquant la filte sur ma bouche,
Riant et m'asseyant près de lui sur son coeur,
M'appelait son rival et déjà son vainqueur.

Il façonnait ma lèvre inhabile et peu sûre,
A souffler une haleine harmonieuse et pure,
Et ses savantes mains prenant mes jeunes doigts,
Les levaient, les baissaient, recommençaient vingt fois,

Leur enseignaient ainsi, goïque faibles encore,
A fermer tour à tour les trous

Que de fois ses baisers ont pressé mon visage !
Et les bergers disaient, me voyant triomphant,
O que de biens perdue ! ô trop heureux enfant !

(Épigrammes, IV)

(大塚。——ぼくはかよい子供だったが、かの女は大きく美しかった。かの女はにつこり笑つてぼくを呼びよせた。かの女の膝に立つて、ぼくの無邪氣な手が髪、顔、胸をまさぐると、時々やさしい手が子供のいたずらを罰するまねをした。誇らかな美女はとりわけ戀人達の前でぼくを愛撫した。いくたび(といつても、この齡で何を感じよう！)かの女の口づけがぼくの顔に押しつけられたことか！得意顔のぼくをみて、愛人達はいつたものだ、〃おお、勿体なや、あまりに幸いなる子よー〃)

シェニエの牧詩はかれの作中もつとも彫琢されなかつたものだ。しかしわれわれは、フランス語において、これほど感動的な詩を知らない。それは古代の詩の特質、あの細部の真実さと比喩の豊かさによる。

けれどもシェニエの才能が光彩をはなつのは、特にエレジーにおいてである。——

「ここでは、かれはオリジナルで、いかなる敵手の追隨もゆるさない。おそらく古代の慣習はわれわれを迷わせ、またわれわれもあまりに好意的に不幸な詩人の最初の試作を読んだ

であらう。しかし、あらゆる欠点にもかかわらず、アンドレ・ド・シェニエはわれわれの間で真実のエレジーの父、またモデルとみなされるであらう。われわれはこのことをあえて信じ、かつ公言してはばからないのだ。」

この若い才能が早くも完成にむかつてみづから前進していたのを見ると、深い尊敬を禁じえない。実際、古代のミューズの中で育まれたこの詩人には、言葉の親しみだけが欠けていたのだ。かれ

Ou si, près d'une belle, assis en un repas,
Nos lèvres en riant ont murmuré tout bas,

Elle a tout vu. Bientôt, cris, reproches, injure ;

Un mot, un geste, un rien, tout était un parjure.

"Chacun pour cette belle avait vu mes égards.

"Je lui parlais des yeux, je cherchais ses regards."

Et puis des pleurs, des pleurs... Que Memon sur

sa cendre

A sa mère immortelle en a moins fait répandre.

Que dis-je ? sa colère ose en venir aux coups...

(Camille, 5)

(大意。——友よ、グリセールのところに宴があるのか。美しいアメリカも列るのか。柔かな踊りで楽しませるローズは？... よろしい、ぼくも行こう。けれど、もしカミーユが知つたなら！ 宴のあとでどんな嵐が起るだろう。おお！ かの女の威力のほどは分るまい。ぼくが誰かの口元や微笑をほめたり、美しい女のそばに坐つてゐたりすれば、かの女はすべてを見抜いてしまつた。叫聲、非難、悪口。ほんのちよつとした言葉、身振でも、すべて裏切だつた。〃ぼくがその女に心を配つてゐたことは誰でもみていた。ぼくは目で話しかけ、女の視線をもとめていた〃とくる。そして涙、涙：メムノンの母も及ばぬ涙だ！ しかもかの女の復讐は打ちかねない。)

次の詩も同じく、区切りの変化、表現の鮮かさに光つている。

Une amante moins belle aime mieux, et

え、// おお、美しい！//と持てはやされる女は、得々として戀のなやみと侮辱する。女王のごとく、畏れおののく追従者の真中で、勝手氣ままに振舞い、今日はやさしく、明日は冷たい。誰かがその呪縛をのがれても、求愛者の數がひとつ減つたくらいは何でもない。かの女は自分を愛し、讚美し、自分の吹込む愛しか知らないのだ。

限られた紙數では、この「特異な作品」の中でわれわれの目をひいた詩篇をすべて紹介することはできない。しかしシェニエの不揃いなスタイルにもかかわらず、次のようなイマージュに出会わないシェニエはほとんどない。

Où si tu la voyais cette belle coupable,
Rougir et s'accuser et se justifier;
Sans implorer sa grâce, et sans s'humilier!
Pourtant de l'obtenir doucement inquiète,
Et les cheveux épars, immobile, muette,
Les bras, la gorge nus, en un mol abandon,
Tourner sur toi des yeux qui demandent pardon.
Crois qu'abjurant soudain le reproche farouche,
Tes baisers, porteraient le pardon sur sa bouche.

(Fragments d'Épigrammes, XXVII)

(大意。——あゝ、もし君がこの罪のかゝる女をまたなれば、——かの女は顔を赤らめ、罪を告白し、赦しを乞わんが、赦しをえられるかと心配し、そして髪をふり亂し、

腕も胸もあらわに、じつと無言で哀願の眼を君にむけているのだ、君よ、信じたまえ、君の口づけはかの女の口へ赦しをもたらさだろう。)

もう一つ別種の断篇。これは誰か古いフランスの詩人の詩を想わせる。(この「フュー」は“Souvent, las d'être esclave...”にはじまるエレジの断片

Ils laissent juger la fortune,

Qui fait juste celui qu'elle fait tout-puissant.

Ce n'est point la vertu, c'est la seule victoire

Qui donne et l'honneur et la gloire.

Teint du sang des vaincus, tout glaive est innocent.

(Odes, IV, *Epode* 1)

(大意。——空しい希望・無駄な心勞・權力追隨は人間共通の野心だ。それは人間の快樂、欲求だ。見ることは目を疲らせ、判斷するのは面倒とあらば、審判は運命のまだ。運命はみづから全能ならしめるものを正者とする。名譽をあたえるのは徳義ではない。ただ勝利のみだ。敗者の血に染まつた劍は、すべて正しい。)

また、

C'est bien. Fais-toi justice, ô peuple souverain!

Dit cette cour lâche et hardie.

Ils avaient dit: c'est bien, quand, la lyre à la main,

L'incesteux chanteur, ivre de sang romain,

Applaudissait à l'incendie.

(Le Jeu de Paume, XIX)

(大意。——よろしう。主權者人民よ、みづから責めよ、とこの卑怯な追従者らはいふ。曾てローマの血に酔つた不倫の歌い手(ネロン)が、堅琴を手に、火災に喝采した時も、かれら(ローマの廷臣達)はいつた、よろしうと。)

要するに、アンドレ・

社交界の人々よ、文士諸君よ、（とユゴーは気負い立つた口調でいう）、諸君は笑い、あるいは肩をそびやかすだろう。われわれ仲間であつてゐるのだが、おそらく諸君の中で詩人の何たるかを解するものは一人もないだろう。諸君の邸館に、あるいは巢窟に、詩人をみかけるだろうか。詩人の魂の第一条件は、卑劣と虚偽の価値を計算しなかつたということだ。この世紀の詩人諸君よ、諸君の仲間に「鉄の声」*Ferra vox*をもつ人間がいるだろうか。諸君は時によつて音色をかえる琴の絃のようなものだ……

「先日ぼくは、匿名で、ただ *Méditations poétiques* と題して出た一書をひらいた。それは韻文であつた。

ぼくはこの韻文の中にアンドレ・ド・シェニエ的な何かをみた。ずつと目を通しながら、ぼくは思わず知らずこの書の作者と「囚われの乙女」*la Jeune Captive*の不幸な詩人との間に比較をこころみた。両者には、いづれも同じ獨創性、同じ思想の新鮮さ、斬新かつ真実なイマージュの華麗さがある。ただ前者は描写において莊重で神秘的だが、後者はより情熱的で愉快で、趣味と正確さの点では大いに劣つてゐる。二人とも愛に鼓吹されてゐる。しかし、シェニエにあつてはこの感情はつねに世俗的だが、ぼくの比較する作者にあつては、現世の情熱はほとんどつねに神聖な愛で純化されてゐる。前者は自分のミューズに古代のミューズの單純嚴格な形式をあたえることに努めたが、後者はしばしば父祖や予言者の語法を採用し、時にはオシアンの夢想的なミューズや、クロプシュトックやシラーの如想的な女神に従うことも辞さない。

要するに、ぼくは多くの異同（といつても大したものではないが）を認めるけれど、前者はクラシック中のロマンチックで、後者はロマンチック中のクラシックだ。」

ついに詩人の詩があらわれた。ポエジーである詩が！（といつてユゴーはこの

そして「ル・コンセルヴァトゥール・リテレル」も、気鋭の青年達の参加とともに、次第に新しい方向を明確にし、三十冊を発行すると、エミール・デシャンらの「ラ・ミューズ・フランセーズ」¹⁾へ発展的解消をとげる。「ラ・ミューズ・フランセーズ」といえば、すでにローマン派の公的機関誌であり、その創刊号に有名なシェニエの詩句 “*Sur des penseurs nouveaux faisons des vers antiques*” が、エピグラフとして掲げられていたことは知られている。

他方、ラマルティヌの「瞑想詩集」が史上ロマンチック時代を劃したことも周知の通りで、この期に両者を比較したことは、より現実的な意味をもつたであろう。これについてポール・グラシャンは「この比較において、かれは類似点よりも相異点を強調しているが、しかしヴィクトル・ユゴーが、サント・ブーヴとまったく同様に、喜んでアンドレ・シェニエを新しい流派の先駆とみなすであろうことは察せられる」といつている。そしてそのサント・ブーヴもやがて「ヴィクトル・ユゴーはアンドレ・シェニエの継承者である」という。

とまれ、ローマン運動におけるユゴーの地位、役割を考えるならば、かれのこうした発言の意味は容易に首肯されるであろう。

- 1) *La muse française* (juillet 1823-juin 1824)
- 2) Paul Glachant, *André Chénier, Critique et Critiqué*, P. 286.

* なおユゴーの原文は主として Jules Marsan, *le*